

ミシェル・フーコーの「権力」概念の検討

「規律・訓練」概念を構成する「戦術」と「戦略」概念を中心に

藤田 博文*

本稿の課題は、ミシェル・フーコーの「規律・訓練」概念が「戦術」、「戦略」という軍事概念によって構成されていることを明らかにすることによって、フーコー権力論をダイナミズムをもって再構成するための第一歩を踏み出すことである。まず「戦術」、「戦略」概念を明確に規定し、それらが「二重の条件づけ」という関係にあることを示す。そして次ぎにこの「戦術」、「戦略」概念が生み出される母体となった「系譜学」という方法を考察し、これら両概念を方法の側面から規定していく。そしてさらに、すでに規定した「戦術」、「戦略」概念をフーコー権力論の中心に据えることによって、それらと、「抵抗」やそこにおいて重要な役割を担う「『特定領域の』知識人」といった彼の権力論にとって重要な諸概念とを一貫した内的論理でもって関係づけることができるということを示し、そのことがフーコー権力論の全体像をつかむための出発点となることを提示する。

キーワード：戦術，戦略，系譜学，抵抗，「特定領域の」知識人

目次

はじめに

1. 「戦術」および「戦略」としての「権力」

(1) 戦術

(2) 戦略

2. 系譜学

3. 抵抗

(1) 抵抗

(2) 「特定領域の」知識人

おわりに フーコー権力論の新たな再構成に向けて

はじめに

本稿の目的は、ミシェル・フーコーの権力論、つまり「権力」概念やそれに関連する諸概念を整理しながら、そのなかにダイナミズムを読み込み、そして彼の権力論を新たに再構成する展

望を見据えることである。

今日、フーコーの理論は、社会理論を構築するにあたってますます重要になってきている。この重要性は、さまざまな領域において個人の「個別化 individualisation」がますます進行している状況と関連している。貧困問題などの19世紀的問題に加えて、経済的な問題としてだけでは捉えきれない問題が、社会運動とともに、20世紀、特に1960年代後半あたりから、従来では問題とされなかった諸領域から起こってくる。そして1970年代あたりから、「女性、子供、精神障害者、身体障害者、そして労働者、人種的マイノリティ、などに関して、彼らが抑圧され、支配されてきた歴史とそのメカニズムを明らかにしようとする」¹⁾ 諸科学が台頭してくる。フーコー自身も1960年代以降、臨床医

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

学、狂気、監獄、そしてセクシュアリテなどの周縁領域の諸問題に取りかかるようになる。そして彼が主張する「『権力』の過剰」による「個別化」の問題が、これらの問題に潜むひとつの共通項として析出される²⁾。その意味で、フーコーの理論を正確に捉えることが今後ますます重要になってくるように思われる。

さらにまたフーコーの理論の重要性は、フーコーの理論がさまざまな学問領域で援用され、受容されていることから理解できる。そしてこれらのどれもがフーコーの「権力」概念と直接的にも間接的にも関わっているのである。言い換えれば、彼の理論を理解するためには、彼の「権力」概念を第一に理解しなければならないのである³⁾。というのも、この「権力」概念は、従来の権力論、つまり狭義の政治の領域に還元する権力論や、権力を所有として捉える権力論に新しい視角を与えるように思われるからである。つまりフーコーのいうところの国家装置の外部に位置する「日常的で、はるかに微細なレベルで、(省略)機能している権力のメカニズム」⁴⁾を捉えることによって、もう一度、上述した従来の権力を別の視角から捉え直す可能性をフーコーの権力論はもっているのではないかと、ということである。したがってフーコーの権力論を正確に一貫した内的論理に沿いながら把握することは、今日たいへん重要なことのように思える。

そこで上述した本稿の目的を達成するためには、フーコーの「権力」概念はもちろんのこと、それに関連した他の諸概念、つまり「系譜学」、「抵抗」、そして「『特定領域の』知識人」という重要な諸概念も明確に規定する必要がある。つまり、彼の権力論を一貫した内的論理にしたがいながら正確に読み込むことによって、これ

らの諸概念を整理し、相互に関連づける必要がある。そこで結論を先に言えば、彼のこの権力論を支える論理の中心を占めるのは、本稿の副題にも示されているように「戦術」と「戦略」という2つの概念であると考えられる。これらの概念は、彼の「権力」の2つのレベルを示しており、これらを明確に区別すると同時に、関連づけることによってこそ、上に述べた「系譜学」、「抵抗」、そして「『特定領域の』知識人」という諸概念を含めたフーコーの権力論全体をダイナミズムをもった一貫した内的論理でもって捉えうる可能性が生まれるのである。フーコー権力論に関する従来の諸研究では、「権力」概念を定義する際に「戦術」や「戦略」という概念を使用しているテキストはあるが、その概念の性質や機能を明確に説明しているテキストはないし、ましてや「戦術」や「戦略」という概念を彼の理論の中心に据えて彼の権力論全体を捉えたテキストは存在しない。たとえばフランスのF.グロは「戦略、戦術、力の関係 *rapports de forces* という用語において権力関係が考察されなければならない」⁵⁾と述べてはいるものの、ここではこれらの用語のそれぞれは明確に規定されてはいないし、それらの関係も捉えられてはいないのである。しかし彼の著作は、それらの用語を重視している点では、フーコーの権力論全体を捉えるうえで無視しえない位置を占めているといえる。また日本においては、近藤哲朗氏がフーコーの権力論の著作『監視することと処罰すること 監獄の誕生』の論理構造を提示することによって、方法論的水準という観点から、権力分析の構図 *framework* として、その分析対象である「装置」と、その「装置」を分析するための2つの分析水準、すなわち「戦術・テクニク」、「戦略・テクノロジー」

とを明示し、基礎づけている。彼のテキスト⁶⁾は、「戦術」、「戦略」という概念を基礎づけている点で、グロ以上に重要なテキストであるといえるだろう。本稿ではこの近藤氏のテキストに触発されつつ、フーコー権力論のテキストに内在して「戦術」、「戦略」概念をより正確に、かつ明確に規定し、そうすることによって、それらの概念と、「系譜学」、「抵抗」、そして「『特定領域の』知識人」というフーコー権力論にとって重要な諸概念とをさらに関連づけ、彼の理論のダイナミズムを提示し、彼の権力論を新たに再構成する展望を見据えていきたい。

1. 「戦術」および「戦略」としての「権力」

(1) 戦術

ここでは「戦術 *tactique*」レベルにおける「権力」概念をみていく。まさにこのレベルでの「権力」こそ、従来のフーコー権力論で強調され、取り扱われてきた概念である。しかしこの「戦術」は、第2節で述べる「戦略 *stratégie*」との関係のなかで語られなければならない。先取りすれば、一方の後述する「戦略」レベルでの「権力」では、「対抗戦略」との関係において非常に不安定な権力関係、つまり「ある永続的な結合と逆転」が常に存在している権力関係をみていくが、他方の「戦術」レベルにおける権力関係では、大ざっぱに言えば、それが固定された状態、つまり「対立関係の成就 *fulfillment* と同時に保留 *suspension*」という状態においてみていくことになる。そしてこのような安定した状態でこそ、他者の行為 *conduct*⁷⁾ を「合理的な確信をもって」導くことができるのである。

まず「戦術」という技術 *technique* / 技法

art を説明するまえに、その技術の上位に位置づけられる「規律・訓練 *discipline*」とはいかなる権力なのかということのみていかなければならない。「規律・訓練」が標的とするのは身体なのであるが、17, 18世紀以前にも、またいかなる社会においても、身体に対して拘束・禁忌・義務を課する権力が存在していた。では「規律・訓練」の新しさとは何か。フーコーはそれについて3つの次元をあげている。第1に「制御 *contrôle* の階梯。不可分な統一単位 *unité* ででもあるかのように身体を、かたまりとして、大ざっぱに扱うのが問題なのではなく、細部にわたって身体に働きかけること、微細な強制権 *coercition* を身体に行行使すること、運動・動作・姿勢・速さという力学のまさにその水準で拘束を確実に行うことが問題なのである。つまり、活動的な身体へおよび最小限の権力である」⁸⁾。第2に「制御の客体。それは行為のシニフィアンな構成要素もしくは身体言語ではなく、またそれらではもはやなく、運動の節約や効果や内的組織である。束縛の対象は表徴であるよりも体力 *forces* であって、真に重要である唯一の儀式は訓練 *exercice* のそれである」⁹⁾。最後に「制御の様相 *modalité*。それは活動の結果によりも活動の過程に気を配る、絶え間のない恒常的な強制権を含むものであり、最大限に詳細に時間・空間・運動を碁盤目状 *quadrille* に区分する記号体系化にもとづいて行われる」¹⁰⁾。このように身体の細部へ働きかけること、体力を束縛すること、そして碁盤目状の記号体系へ身体を配置すること、このような方法が「規律・訓練」と呼ぶものなのである。そしてさらに重要なのは、規律・訓練が身体の服従性と効用性の比例関係を目指すことにある。つまり「人体を検査し、分解し、再構成す

る」権力装置 *machinerie de pouvoir* と、「単に他の人々にこちらの欲する事柄をさせるためばかりでなく、こちらの望みどおりに、技術にのっとって、しかもこちらが定める速度および効用性にもとづいて他の人々を行動させるためには、いかにしてこちらは彼らの身体に働きかけるか、そうした方法を定義する」¹¹⁾ 政治解剖学 *anatomie politique* との比例関係を目指すことにあるのである。まさにこの権力装置と政治解剖学こそが、フーコー権力論の二著作『監視することと処罰すること』と『セクシュアリテの歴史 知への意志』での中心概念である「権力 - 知 *pouvoir-savoir*」なのである。

身体を標的にし、個人をつくり出すこのような「規律・訓練」は、4つの側面、すなわち「空間の配分」、「活動のコード化」、「時間の累積」、そして「力の組立」という側面をもっている。前者3つの側面には、後述するように、主要な技術、すなわち「一覧表」、「操練」、そして「訓練」という技術がそれぞれ対応する。そして最後の側面である「力の組立」こそ、前の3つを包摂している「戦術」という技術/技法なのである。この「戦術」とは「一覧表」、「操練」、そして「訓練」といった技術と同様にひとつの「技術」であるだけでなく、それらを総合して、すなわちそれら3つの側面を用いて「規律・訓練」という権力の効力を増大させる「技法」でもあるのである。まさにこのような「戦術」という技術/技法こそ、他の3つの側面における各々の技術を規定するのである。

フーコーは「戦術」という技術/技法を次のように説明している。軍事上の要請、つまり物理的モデルを基にした密集部隊から兵士やその統一単位（連隊、大隊、小隊）の有機的配置の要請や、経済上の要請、つまりマルクスの結合

労働日 *journée de travail combinée* を例示しつつ、「ある生産力の成果がその生産力を組み立てる基本的な諸力の総和をしのがねばならない」¹²⁾ という要請に呼応して、「規律・訓練はもはや単に、さまざまの身体を配分し、それから時間を抽出し、かつ累積するだけではなく、効果的な仕組みを獲得するためにさまざまの力を組み立てる技法となった」¹³⁾ ののである。このような要請は次のような仕方でも示される。第1に、ひとつの身体は他の身体と連結し *articuler*、またある機能へと還元される。つまり「身体は、多様に分節化した *multisegmentaire* 機械装置の部品として組織されるのである」¹⁴⁾。第2に、その部品は、規律・訓練によって各種のクロノロジーの系列に配分され、複合的時間を形成する。例えばフーコーは相互教育学校 *école mutuelle* の仕組みについて、

「最年長の児童に、まずは簡単な見張り、つぎに勉強の取り締まり、ついで教育という順に仕事を託したわけで、その結果つまりは全児童のすべての時間が、あるいは教育を受けるか、あるいは教育を受けるかに充当されるようになったのである。学校は、それぞれの児童、それぞれの水準、それぞれの時期がみごとに組み合わせられると、それらが教育の全体的過程のなかで永久に活用される学習の装置となるわけである」¹⁵⁾

と述べている。第3に、このようなさまざまな身体や力は、精密に組み合わせられ、ある全体をなすのであるが、それには精確な命令システムを必要とする。その命令においては、説明したり、言葉で指示したりする必要がなく、記号を表示する必要がある。つまり服従する人間は、発せられた信号のコードに素早く反応する必要があるのである。

このような「戦術」において上述した他の「規律・訓練」の側面、つまり「空間の配分」、「活動のコード化」、「時間の累積」が構成される。ここでは、それらについて詳しくは述べることができないが、簡単にみていくと、「空間の配分」とは、身体を「序列rang」における「閉鎖空間」、つまり「横の列と縦の列が交わる地点」に位置づけ、身体を個別化し、個々人に対して観察可能にすることであり、この技術は「一覧表tableaux」と呼ばれている。次に「活動のコード化」とは、身体の動きを綿密に取り締まるcontrôlerことである。これに関して彼が特に重視しているのは身体=客体の連結関係articulationを打ち立てることであり、言い換えれば「動かすべき身体の諸要素（右手、左手、手のさまざまな指、膝、目、腕など）の系列と、操作する客体の諸要素（銃身、照門crante、撃鉄、ボルトなど）の系列」¹⁶⁾との連結関係を打ち立てることである。したがって「権力は、身体=兵器、身体=道具、身体=機械という一種の複合complexeを構成する」¹⁷⁾のである。このような統治法（つまり技術）を「操練manœuvre」と呼ぶ。そして最後に「時間の累積（「段階的形成の編成l'organisation des genèses」ともいう）」とは、時間の流れを調整された各段階に分割し、その各段階に各人を配置し、試験épreuveでもってその段階の終局とするというものである。そして各段階では、各人に適する訓練exercicesを「彼の水準、年功、位階に応じて各人に定め」られるのである。この技術は「訓練」と呼ばれる。このような「一覧表」、「操練」、そして「訓練」といった技術は、上述したように「戦術」に包摂される。前者の技術は、すべて後者の技術/技法に通じるのである。

またフーコー研究（特に権力論）において必ずといっていいほど論じられる、あの有名な「一望監視施設panopticon」は、まさにこの「戦術」レベルにおいて論じられなければならないのである。

そこでフーコーは「戦術」について次のように述べている。「規律・訓練的戦術は、個としての個人の特徴と同時に、ある所与の多様性を秩序立てることが可能になる。その戦術こそは、さまざまな構成要素の総体の制御ならびに活用のための第一条件である。つまり、独房的と名づけてよいある権力のいわばひとつの微視物理学microphysiqueのための基礎なのである」¹⁸⁾と。また次のようにも述べている。「戦術とは、持ち場の指定された身体、コード化された活動、養成された能力を用いて、様々な諸力の産出がそれら力の計画的な組み合わせによって増大される仕組みをつくりあげる技法であって、こうした戦術は規律・訓練実践pratique disciplinaireの最高形式といってよいだろう」¹⁹⁾と。

したがって「戦術」は、後述する「戦略」と同様に重要な概念であり、他の権力の技術を包摂する概念なのである²⁰⁾。だからフーコーの権力論は「戦術」と以下にみる「戦略」を中心に語られなければならないのである。

（2）戦略

前節では「権力」を「戦術」という観点から再構成した。しかし、この「戦術」というレベルだけではフーコーの権力論を捉えきることができない。つまりフーコーの「系譜学」や「抵抗」などの概念が、彼の理論のなかに一貫した論理でもって位置づけられえないのである。そこで、ここでは「戦術」とは異なるもう一方の

側面である「戦略」レベルでの「権力」をみていくことにする。

フーコーは「戦略stratégie」という語の用法について3つの区別をしている。

「第1に、ある目標を達成するために用いられる手段をさす。それはある目的に達するために働いている合理性の問題である。第2に、あるゲームの参加者が、相手がとるであろうと考え、当の相手も自分のとるべき行動だと考えていることに関連して行動する仕方をさす。それは、人が他者に対して優位に立つとするための手段である。第3に、敵対者から闘争手段を奪い、闘争を放棄するように仕向けるために、ある対決状況において用いられる手続きをさす。それは勝利を獲得するよう定められた手段である」²¹⁾。

そしてこれらの「戦略」の性質は「戦争あるいはゲーム」という状況のなかで同時に現れる。ここから次のように「戦略」を定義することができる。つまりそれは「勝利をもたらす諸解法の選択」²²⁾であると²³⁾。フーコーはこのような「戦略」を「権力の戦略」とか「権力関係に固有の戦略」と呼んでいるが、より重要なことは、このような「戦略」と「対抗戦略 confrontation strategies」との関係性であると述べている。この関係性とは、権力関係が「対抗戦略」（または「闘争の戦略strategy of struggle」とも述べられている）との関係として、つまりそれが「対抗戦略」を前提としてはじめて存在しうるものであるというものである。フーコーはこの対立の関係性について次のように述べている。「もし権力関係の核心に、しかもその永続的な存立条件として、不服従と自由の原理へのある本質的な固執とがあるというのが本当たどしたら、その場合には、脱出あるいは逃走の手

段なしにはいかなる権力の関係性も存在しえない」²⁴⁾と。したがって、権力関係と「対抗戦略」との関係には「ある永続的な結合linkingと逆転reversal」が常に内包されているのであり、それは非常に不安定な関係であるといえる。

このような「権力」の関係性について、フーコーは『監視することと処罰すること』において次のように述べている。「権力」の研究が仮定すべきことは、

「行使される権力が、ひとつの固有性としてではなく、ひとつの戦略として理解されること。（省略）われわれが、権力のうちに、保持しうるであろうひとつの特権を見抜くよりもむしろ常に緊迫し、常に活動中の諸関係の網の目を見抜くこと、そしてわれわれが、ある譲渡取引を行う契約、あるいはある領土を占領する征服よりもむしろ、モデルとして永久に続く戦いを権力に与えること」²⁵⁾

であると。つまりこの「権力」は、

「『それ（権力 筆者挿入）をもたない者』に純粋にかつ単純に、ある義務あるいはある禁止として強制されるのではなく、権力が彼らを攻囲しinvestir、彼らによって、また彼らを通して貫かれる。つまりこの権力は彼らを抛り所にするのである。全くちょうど権力に対する闘争において、今度は彼ら自身が、権力がこちらに加える影響力を抛り所とするように」²⁶⁾。

また同様に『知への意志』において彼は次のように述べている。

「権力という語によってまず理解すべきだと思われるのは、無数の力関係であり、それらが行使される領域に内在的で、かつそれらの組織の構成要素であるようなものだ。絶えざる闘争と衝突によって、それらを変形し、強

化し、逆転させる勝負＝ゲーム*jeu*である。これらの力関係が互いのなかにみいだす支えであって、連鎖ないしはシステムを形成するもの、あるいは逆に、そのような力関係を相互に孤立させずれ*décalages*（ないしは『不調和』 筆者挿入）や矛盾である。更に言うなら、それらの力関係が効力を発揮する戦略であり、その全般的構図ないし制度的結晶が、国家の機関、法の明文化、社会的ヘゲモニーにおいて実体化されるような戦略である」²⁷⁾。

つまり「権力とは、ひとつの制度でもなく、ひとつの構造でもないし、ある種の人々がもっているある種の力でもない。それは特定の社会において、錯綜した戦略的状况に与えられる名称なのである」²⁸⁾。このように「権力」を戦略として捉えるという視座は、フーコーが権力論を展開した両著作をも貫いているのである。

したがって「戦略」概念は、権力を関係性（ゲーム、戦争、格闘、戦い）として捉える観点を内包しており、またそれを規定する「対抗戦略」をも可能的、潜在的*potentia*に内包しており²⁹⁾、そしてこのような戦略的な状況こそが、フーコーのいう「権力」の一つのレベルなのである。

これまでフーコーの「権力」の2つのレベル「戦術」レベルと「戦略」レベルを提示してきたが、ここで「戦術」と「戦略」の関係のみていきたい。

フーコーは『知への意志』のなかで、「権力」についての4つの規則*règles*を立てる。そしてそのひとつとして「二重の条件づけの規則」を提示する³⁰⁾。まさにこの規則こそ、従来のフーコー権力論において重視されなかつたところであり、「戦術」と「戦略」の関係を提示したと

ころなのである。まず彼はそこで、君主あるいは国家と父、また社会と家族との関係を、マクロとミクロとの連続性としては認めるが、また一方が他方の拡大図または縮小図である同質的な関係として捉えることを拒否する³¹⁾。そこで家族という装置を例にとれば、それを「島の*insulaire*な性質」として、つまりそれを他の装置とは異なる形態として捉えるのである。したがってこのようにある装置（たとえば家族）を「島の性質」をもつものとしてみなすことによって、その装置を拠点として様々な「作戦*manœuvres*」³²⁾を展開することができるのである。そしてこの点にこそ、無数の力関係の網の目であるフーコーの「権力」の特徴がある。そこから次のことを考えることができる。つまり「可能な戦術の特殊性による戦略の条件づけと、戦術を機能させる戦略的覆い*enveloppe*³³⁾による戦術の条件づけ」³⁴⁾という「二重の条件づけ」である。言い換えれば、ある戦略をとることは、戦術というある特殊な技術/技法を規定することになり、またある特殊な戦術を採用することは、ある特定の戦略を規定することになるという両者の条件づけである。フーコー権力論において、まさにこの「二重の条件づけ」を捉え、これを中心に据えることこそが、彼の「権力」概念を理解する上で最も重要なことなのである。そしてそうすることによって、彼の「系譜学」や「抵抗」が一貫した論理でもって彼の理論のなかに位置づけられるのである。以下それをみていくことにする。

2. 系譜学

ここではフーコーの「系譜学*généalogie*」をみていく。「系譜学」はフーコーの「権力」概

念を生み出した母体であり、前章でみた「戦術」、
「戦略」と呼応している。この母体は、ニーチ
ェの「系譜学」をフーコーなりに吸収したも
ので、この吸収によって彼の権力論が可能とな
ったのである。

ところで、この「系譜学」と、それを吸収す
る以前にフーコーが使用していた方法である
「考古学archéologie」とは全くの断絶関係にあ
るのではない。それらは分析対象の重点の置き
方の違いという関係にある。後者ではディスク
ールの編成規則に優位性を置いており、また前
者では「権力」、すなわち「実践の体制」に優
位性を置いているのであって、フーコーにとっ
てディスクールと「権力」の節合の問題は「考
古学」にしても「系譜学」にしても維持されて
いるテーマなのである³⁵⁾。しかし「考古学」に
おいては「権力」概念がまだ明確に提示されて
おらず、そしてその欠陥を補うものとして「系
譜学」という方法が提示されたのである³⁶⁾。

フーコーが「系譜学」について最初に言及し
たのは1970年12月2日に行われたコレージュ
・ド・フランス教授就任の開講講演（以下
『ディスクールの秩序』と記す）のときである³⁷⁾。
そしてこの『ディスクールの秩序』のなかには、
彼の「権力」概念の萌芽を見て取ることができる。
彼は『ディスクールの秩序』において、現在
における自らの仕事の所在を明確にするため
に次のような仮説を立てる。

「あらゆる社会において、ディスクールの生
産は、いくつかの手続きによって同時に統御
され、選択され、組織化され、再配分される
ものとわたしは想定する。そして、これらの
手続きは、ディスクールの力と危険とを払い
のけ、その偶然に左右される出来事を支配し、
その重苦しく、おそるべき物質性を避ける働

きをする」³⁸⁾。

このいくつかの「手続き」のひとつが、ディス
クールへの外部からの手続き、つまり「真理へ
の意志」による手続きである。まさにこの「真
理への意志」こそが「主体」分析を可能にし、
彼の「権力」概念を生み出す萌芽となるのであ
る³⁹⁾。そしてこの「権力」と切っても切り離せ
ないのがフーコーの「系譜学」である。「系譜
学」については『ディスクールの秩序』で簡単
に述べられているが、翌年に出版された論文
「ニーチェ・系譜学・歴史」において「系譜学」
がいかなるものかということ、さらに展開す
ることになる。H.L.ドレファスとP.ラビノウ
は、このテキストについて「そのあとに続くフ
ーコーの作業の進展を理解する上で、この論文
の重要性をいかに高く評価してもしすぎるこ
とはないだろう。1970年代のフーコーの仕事の
種子はみな、このニーチェ論のなかにみいださ
れるから」⁴⁰⁾だと評価している。そこで以下、
「ニーチェ・系譜学・歴史」を中心にみていく
ことにする⁴¹⁾。

「系譜学」とは何か。それを理解するためには、
フーコーがニーチェの著作（特に『道徳の
系譜学』）のなかにみた「起源Ursprung」と
「由来Herkunft」、「現出Entstehung」との区
別、またはその対立を捉えなければならない。
「系譜学」は「起源」を探究するのではなく、
「由来」と「現出」を探究する。「起源」を探究
することは「ものの正確な本質、その最も純粋
な可能性、慎重にそれ自体に限られたそのアイ
デンティティ、外的で、偶有的で、継起的なあ
らゆるものに先立つその不動の形をつかみ取る
うと努める」⁴²⁾ことである。つまりそうすること
は、『すでにあったもの』を再びみい出すこ
と、自身と正確に等しいイメージの『そのもの

自体』を再発見しようと努めることである⁴³⁾り、「起こりえたあらゆること、あらゆる策略、あらゆる仮装を偶発的なものとしてみなすことである⁴⁴⁾り、「あらゆる仮面を取り除いて、ついには原初のアイデンティティを明らかにしようとするのである⁴⁵⁾。すなわち「起源」とは「失墜の前、身体の前、世界と時間の前のものなのである⁴⁶⁾。ここからそれは、超歴史的な意味をもつ「真理の場」ということができる。したがって「起源」を探求する「歴史家」は、あらゆる現象の根底に不動なものを求め、歴史に根本法則と形而上学的な目的性を求めるのである。

これに対して系譜学者の作業は「起源」の探求をすべて放棄し、「単一な究極指向性のまったく外に、さまざまな出来事 *événements* の独自性を見定める⁴⁷⁾」ことである。そしてこの出来事の独自性は「起源」においてではなく、「由来」と「現出」において見定められる。そこで「由来」とは「微妙で、独特な、個の下にかくれているさまざまな痕跡 *marques*、個の中で交差しあい、解きほぐしがたい網目をつくっていることもありうる痕跡⁴⁸⁾」を求めることである。そこでフーコー権力論との関係で重要なのは、「由来」がこの痕跡を身体に求めるということである。フーコーは述べる。

「身体　そして身体とかわるすべてのもの、食物、風土、土壌　これは『由来』の場である。身体から欲望、過失、誤謬が生まれるのと同じように、身体の上には過去の出来事の烙印がみられる。過去の出来事はまた、身体において結集し、突如として自己表出をするのだが、身体においてまたバラバラとなり、戦いはじめ、互いに消し合い、その押さえがたい葛藤を続けていくのである⁴⁹⁾。

まさに「由来の分析としての系譜学は、身体と歴史との結節点 *articulation* にあるのである⁵⁰⁾。後にフーコーは、この身体の問題を「身体の政治的テクノロジー⁵¹⁾」として扱うことになる。

このように「由来」は身体に烙印された痕跡のことであり、その分析はその痕跡を示すのであるが、この痕跡は何によって刻みつけられるのか。それは「支配 *domination*」であり、「支配」とは力の対立関係が固定したもので、つまり「権力の儀式」である。つまり「支配は痕跡を打ち立て、ものの中に、さらには身体の中にまで追憶を刻み込む⁵²⁾」のであり、「支配の関係は、支配の行われる場所が場所でないように、もはや『関係』ではなくなる。そしてまさにそれゆえに、歴史の各瞬間において、支配が儀式のうちに固定してしまうのである。支配は義務と権利を強制する。支配は入念な手続きをつくりあげる⁵³⁾」のである。そしてまさにこの「権力の儀式」を追求したものがこそが、『監視することと処罰すること』における古典主義時代に考案された「規律・訓練」であり、『知への意志』における18世紀以降さまざまな領域に広まった「告白 *aveu*」の技術なのである。これらの著作をみればわかるように、この「権力の儀式」が普遍的な構造でないことは当然のことである。

では、もう一方の「現出」とはなにか。それは「起源」を拠点として生じるのではなく、「諸力のある状態において常に生じる⁵⁴⁾」ものである。だから「現出」の分析は、身体に烙印された痕跡を示す「由来」の分析に対して、さまざまな「力の戯れ *jeu*」を示さなければならない⁵⁵⁾のである。つまり「現出」とは「さまざまな力の登場であり、その分析はさまざまな諸力の抗争の場を示すことなのである。フーコ

一は、上述した「さまざまな力のある状態」が生み出される源のことを「間隙 interstice」と呼び、この「間隙」が「現出」を引き起こす。まさに「間隙」は「現出」の原動力であり、逆に上述した「支配」とはこの「間隙」の欠如態のことなのである。

このように「系譜学」とは「由来」と「現出」を探求すること、つまり論駁しえない絶対不変のようにみえる真理を生成のなかへ導入することである。そして「由来」と「現出」はそれぞれ1975年以降、本格的に展開されるフーコー権力論の中心概念である「戦術」と「戦略」へと結実する。確かに「ニーチェ・系譜学・歴史」においては「戦術」と「戦略」という軍事概念はまだ使用されてはいない。しかしながら「由来」＝「戦術」と「現出」＝「戦略」といった構図それ自体はすでに存在していたのである。

ところで、この「ニーチェ・系譜学・歴史」のテキストが発表された時期に、すでにフーコーにおいて「権力」への指向性が存在していたことは確かなことであるにしても、第1章でみたように、この「権力」が、後に彼の権力論の中心に据えられる「戦術」や「戦略」といった軍事領域で使用されている概念でもって構成されなければならなかったのは、なぜなのか。その理由として、まず第1に、権力を分析する際に、2つのモデルしかなかったからだというフーコー自身の認識がある。つまり「法学が提供するモデル(法、禁止、制度としての権力)」⁵⁶⁾と「軍事力 forces の関係を研究する際の用語による戦争ないし戦略というモデル」⁵⁷⁾である。そしてこの後者のモデルを基礎にして、彼は関係としての「権力」概念を形成していったのである⁵⁸⁾。第2の理由は、規律・訓練が発展した

18世紀の国家において、軍隊の技術と知が「社会の構成員全体」に投影されたとフーコーが認識している点にある。つまり「国内の平和と秩序の技術としての政治は、完璧な軍隊、規律・訓練を加えられた秘密部隊、従順で有用な部隊、宿営地や戦場での、また操練や訓練を課せられた連隊、こうした装置を活用する努力をしてきた」⁵⁹⁾という点である。すなわち彼は、「戦争とは別の手段による政治の延長である」⁶⁰⁾というK.v.クラウゼヴィッツの命題を覆し、政治が戦争の延長であると考えるのである⁶¹⁾。第3の理由は、軍事上の概念には「激しい対立」を表象させる効果があり、またその対立こそフーコーが重視するものであるからである。つまり「起源」を探求する、またそれに遡及する閉じられた歴史、また予定調和を保証する歴史を放棄し、ある本質が力の抗争の場から「現出」すると考える点にある。そして、このような戦いの場においてこそ「真理」⁶²⁾が生み出されるのであり、この生み出しの場とは「闘争の血なまぐさい残酷さ」が展開される場なのである。だから、彼は次のように自らの理論を弁証法と記号論から区別する。

「(矛盾の論理としての)弁証法も、(コミュニケーションの構造としての)記号論 sémiotique も、激しい対立なるものが本質的にそなえている理解可能性を明らかにすることはできないでしょう。弁証法とは、この理解可能性のもつたえず偶然性に満ちて開かれた現実性を、ヘーゲルの骸骨に矮小化することによって、巧みに避けて通るひとつの仕方なのです。また、記号学 sémiologie とは、この理解可能性がもつ暴力的で、血ぬられた、死をもたらず危険のある性格を、言語と対話というプラトンの的で無難な形式に矮小化すること

によって、巧みに避けて通るひとつの仕方なのです⁶³⁾。

したがって、R.ボデの言葉をかりれば、「権力の歴史は、出来事を導き、出来事の結果を保証し、そして悪に対する善の勝利を見守る hidden hand」すなわち隠れたる手が存在しない、ある場合には明白で、またある場合には目立たない紛争への開かれた歴史⁶⁴⁾なのである。

このような3つの理由から、フーコーは「権力」を軍事概念でもって捉えなければならなかったのである。また1976年3月に行われたモントリオール大学での講演で「軍隊制度についての本を書くことを表明」したことから、彼が軍事について注目していたことがうかがえるであろう⁶⁵⁾。

3. 抵抗

(1) 抵抗

フーコーの理論にとってよく問題となるところのひとつとして、「抵抗 *résistance*」の問題がある。この「抵抗」概念について従来のフーコー論をみても、大枠において2つの争点に収斂する。ひとつは、フーコーが描く「権力」の網の目において、いかにして「抵抗」の拠点を確保できるのかという問題であり、もうひとつは、「抵抗」概念のなかに「プログラミング」の観点が含まれていないということである。

まず、「抵抗」の拠点の問題を考察する際に重要なことは、フーコーが「抵抗は権力の諸関係の戦略的な場においてしか存在しえない⁶⁶⁾」というように、彼の「戦略」概念をいかに理解するかということである。「戦略」とは、第1章でみたように「勝利をもたらす諸解法の選択」

であり、その選択はまさに他者の行動との関係でなされるのであるから、権力は関係のなかで捉えられなければならないのである。つまり「抵抗（第1章では「対抗戦略」のこと 筆者挿入）」は、「権力」に対して外部に位置するのではなく、それらは内的関係にあるのである。したがって、このような内的関係においては、「権力」と「抵抗」は相互に作用の契機として存在しているので、お互いに「排除不可能な相手 *irréductible vis-à-vis*」なのである。フーコーは次のように述べる。「抵抗はそれと対立する権力よりも先にあるわけではない。権力と外延を同じくし、完全に同時的なのです⁶⁷⁾」と。だからいかなる完全な「権力」であっても、それを関係として捉えるかぎり、「抵抗」が可能的、潜在的 *potentia* に権力関係に内包されているのである。

ところでP.ブルデューは次のように述べている。

「急進左翼の異議申し立ての一つは、『権力は下から生じる』、つまり『被支配者にたいして及ぼされる権力を生みだし、被支配者がこうむる権力を生産するのは、被支配者自身である』という主張にあります。ここでは服従という行為が、政治的あるいは社会学的というよりも、むしろ倫理的な論理において、自発的な服従、熟慮の上での自己放棄として描かれているのです⁶⁸⁾。

これは「戦術」レベルの「権力」について述べているところである。この言明によると、「倫理的な論理」でもって、「熟慮の上で」「自己放棄」をする服従行為を描くことから、「抵抗」の拠点が存在しえないことになる。ブルデュー自身の権力概念がいかなるものであれ、少なくともこのような解釈はフーコーの意図するとこ

るではない。フーコーが問題とするのは、被支配者たちが「熟慮の上での自己放棄として」ではなく、ある意味で無意識的に身体化され、また自明性のうちに服従することであり、また彼はそれを「倫理的な論理」ではなく、広義の政治的な論理、つまり「戦術」と「戦略」の論理でもって描いたのであり、そういう意味で彼ら被支配者は「権力」の担い手であると同時に、可能的には「抵抗」の主体なのである。このように考えないと、フーコーが「系譜学」によって「真理」の歴史的特殊性を証明する意味がなくなるのである。要するに、ブルデューは「戦術」と「戦略」との関係を捉えきれていないといわざるをえないのである。

またさらに分析レベルにおいては、フーコーは「抵抗」を軽視するどころか、それを出発点として位置づけているのである。もし「権力」を「戦術」性のみにおいて理解しているならば、「権力」が実体としてみえてしまうが、その「戦略」性を考えると、「抵抗」を出発点と考えることは至極当然のことである。つまり、これは「権力の諸関係を解明し、その位置を定め、それが適用される点と使用される方法とを発見するために、この抵抗を化学的触媒として利用する方法であ」⁶⁹⁾り、言うなれば「内的合理性という観点から権力を分析するよりも、むしろ戦略上の対立をとおして権力関係を分析するのがこの方法なのである」⁷⁰⁾。実際にフーコーは、囚人、性的倒錯者などを権力分析の出発点として権力のメカニズムを解明した。この解明はまさに「戦術」と「戦略」を基盤としてなされたのであり、これらの概念がいかに重要であるかが理解できるであろう。

次に、もう一方の「抵抗」の役割の問題であるが、これはこの概念に法や真理を「プログラ

ミングprogrammation」⁷¹⁾する観点が含まれていないというものである。当然、この「プログラミング」は、「真理」や「主体」が権力関係からいかに生成してきたのかということを問う「系譜学」とは相容れないものである。では「系譜学」を基盤にした「抵抗」は無意味なのであるか。それは「青年保守派」などと名づけられるべきものなのであるか。もちろんこのようなレッテル貼りは上述の理由から妥当性をもたない。ではフーコーは何を目指したのか。それは「系譜学」を基盤とし、各特定領域を単位として「戦略」的な状況の様子を調べることと、「戦術」という権力技術/技法の微細で、複雑な作用を解明することである。B.スマートの表現をかりると、

「主要な目標は戦略の準備をしたり定式化することでも、被支配階級の見解を明確に述べることでもなく、競い合いさまざまな行動のプログラミングの方法の有効性の主張を判断することでもなく、われわれが真と偽の区別を明確にすることによって、自己と他者を管理するようになったさまざまな方法を批判的に検討することである。言い換えると、中心となる問題はさまざまなかたちの社会的ヘゲモニーの複雑な構成の問題なのである」⁷²⁾。

フーコーが「プログラミング」ではなく、「戦術」と「戦略」の解明を第一の課題とするのは、行為の主体、つまり「闘い、抵抗し、現状をもちや望まない人」たちの戦略的関係のなかから変革transformationが生まれるのであって、改革者réformateursの「改革計画」の実現によって変革が起こるわけではないという認識があるからである。フーコーは述べる。「変革が起こるのは、この現実にかかわりのある人たち、そうした人たちのすべてが、お互いどうし、ま

た自分自身ともぶつかりあい、ゆきづまりや当惑、不可能性に直面し、紛争や対立をのりきったときであり、批判が実際に行使されたときのことであって、改革者たちが自らの考えを実現したときのことではないであろう⁷³⁾と。つまり変革は、一個人の理論を実践することによって実現されるわけではないのである。だからフーコーは自らの、またさらに知識人の役割として「権力」分析の成果を「現実にかかわる人」に「道具instrument」として提供することを言明するのである。したがって、実際の行為主体や、彼らに分析を「道具」として提供する観察主体に「プログラミング」するという観点からフーコーの「抵抗」概念に含まれていないのは、当事者間の「戦略」的關係によって変革が行われるという認識が彼にあるからなのである。

そこでフーコーは「批判」について次のように述べる。「批判は、すでにある法に対し、さらに法をつくるようなものであってはならない。それは、プログラミングの一段階ではなく、現在あるものに対する挑戦なのです⁷⁴⁾と。また次のようにも述べている。少し長いが、重要な言明なのでここで取り上げておく。

「権力関係は社会的結合に深く根ざしており、全面的に消滅できると夢想しうるような補足的構造として社会の『上空』に再構成されるようなものではない。いずれにせよ社会のなかで生きることは、他の諸行動に働きかける行動が可能であり、事実、進行中でもあるような仕方での生きることなのだ。権力関係なき社会とは、たんなる抽象でしかない。ついでに言えば、だからこそある社会における権力関係、その歴史的形成、その強靱さと脆弱さの源泉、その変革や廃棄の必要条件の分析がますます政治的に必要になる。というも、

権力関係なき社会はありえないと語ることは、すでに確立されている権力関係が必要であるとか、権力はいずれにせよ社会の核心にあるひとつの宿命をなしており、その基盤を掘り崩すわけにはいかないとか、語ることはないからだ。そうではなく権力諸関係を分析し綿密に問うこと、そして権力関係と自由の自律性との『格闘agonism』こそが、すべての社会的存在に内在する永久の政治的課題である、と言いたいのである⁷⁵⁾。

この引用はフーコーの思想をよく表しているように思われる。フーコーにとって、権力関係から自由になる理想的な歴史の目標はありえないのであって、まさに「戦略」的關係のなかで永久に闘い続けることこそが重要なのである。だからフーコーが目指したのは、「抵抗」概念に「プログラミング」を含ませることによって社会変革を目指したのではなく、変革のために「道具」を提供することであり、そして当事者たちがその「道具」を手掛かりに闘う「戦略」的關係の分析を行い続けることなのである。したがってフーコーの「抵抗」概念は、はじめに述べたように「戦術」概念だけでなく、「戦略」概念の理解によってはじめて彼の理論のなかに位置づけられうるのである。フーコーの「抵抗」概念には「権力」の担い手としての「戦術」的なレベルと、それと対立する「戦略」的なレベルとの両方が含まれており、そこからまさに「権力」という概念は常にダイナミズムを含みもっているといえるのであり、また永久にもち続けるのである。

(2)「特定領域の」知識人

前節で「抵抗」概念について論じたが、フーコーはこの「抵抗」において重要な役割を担う

「知識人」のことを「『特定領域の』知識人 *intellectuel spécifique*」として位置づけた。このタイプの知識人とは「それぞれの仕事の内部で、その仕事の仕組みをよくこころえ自分も歯車のひとつになって働きながら　つまり、精神科医、弁護士、技師、技術者として、それぞれの職業を実際に行いながら　、しかも、その各自の専門領域　つまり、『特殊な』領域　で、知識人の仕事とというような本質的に『批判的な』仕事を行う」⁷⁶⁾人のことであり、職業的知識人であるフーコー自身もこのタイプに位置づけられる。そしてこのタイプの知識人を考える際に重要なことは、「『特定領域の』知識人」たちが「戦術」と「戦略」という権力の形式に組み込まれていながら、「系譜学」によって「戦術」と「戦略」という権力の形式を暴き出すということである。この知識人のタイプに対してフーコーが拒否すべきものとして対置したのは、「『普遍的』知識人 *intellectuel universel*」というタイプである。この知識人とは「正義の人、法の人、すなわち権力、専制、職権乱用、富者の傲慢などに対し正義の普遍性と理想的法の公正さを対立させた人々のイメージから派生したもの」⁷⁷⁾で、つまり「すべての人がそこに自己の像を認めることができるような、意味と価値の保持者」⁷⁸⁾のことである。だからこの知識人は、「『特定領域の』知識人」とは違って普遍性をもつことから、「戦術」と「戦略」という権力の形式には組み込まれえないのである。

ここから、両者の知識人のタイプの違いは、理論と実践との関係の様式の違いとして理解することができる。一方の「『普遍的』知識人」は「戦術」と「戦略」という権力の形式に組み込まれていないことから、その外部に位置する

ことになり、当然彼らの理論も特権的にそこに位置づけられる。そこでG.ドゥルーズの言葉をかりれば、理論は実践を通した全体化の過程であり、実践は理論の応用であり、結果なのである⁷⁹⁾。したがってこの知識人のタイプは、代行=代表 *représentation* という役割を担うことになる。

他方の「『特定領域の』知識人」は、上述したように「戦術」と「戦略」という権力の形式に組み込まれていることから、その内部に位置することになり、そこから彼ら、あるいは彼らの理論は特権的な位置を占めず、「闘うすべての人々とともに一線になら」び、それらは「権力のネットワーク」の一部として位置づけられるのである。ドゥルーズの言葉をかりれば、つまり実践 *pratique* は理論によって中継 *relais* されると同時に、理論は実践によって中継されるのである⁸⁰⁾。つまり理論は全体化されるのではなく、「局部的 *locale* で局所的 *régionale*」なものであり、複数化されるのである。したがってこの知識人のタイプは、代行=代表という役割を担うのではなく⁸¹⁾、まさに「権力のネットワーク」の一部をなすのである。フーコーはこの知識人の役割について次のように述べる。

「知識人たち自身も、この権力システムの一部をなして、彼らが『意識』とディスクールの担い手 *agents* だなどという理念もそれ自体、このシステムの一部をなしているのです。知識人の役割とは、もはや万人の声なき真理を語るために『少し前方かすこし横手』に身をおくことではない。むしろ自らが権力の標的であると同時に道具でもあるような場所、つまり『知』、『真理』、『意識』、『ディスクール』の次元において、権力のさまざまなかたちと闘ってゆくことなのです」⁸²⁾。

このようにフーコーは、自らの位置、つまり既存の「ディスクール」や自らが発する「ディスクール」を「系譜学」による権力分析でもって絶えず検討するのである。前節で述べたように、変革は一個人の理論を実践することによって実現されるわけではないのである。まさに彼の理論は、その意味で応用するものではなく、それ自体ひとつの実践なのである。さらに権力分析でもって検討する彼の理論は、後方で闘う人たちを啓蒙するためのものではなく、特定の領域で抵抗する人たちに必要であれば「道具」として提供するためのものなのである。この「道具」とはどのようなものなのか。それは「弱い線がどこにあり、強い点がどこにあるのか、権力が（今や150年になろうとしているひとつの組織の成立にしたがい）いったい何に結びつけられたのか、そうした権力がどんなところに植え込まれたのか⁸³⁾といった「戦いの地形学的で地質学的な図面 *relevé*」⁸⁴⁾のことである。まさに「『特定領域の』知識人」の役割とは、「戦術」と「戦略」という「権力」の配置図を作成することであり、その配置図を大衆、つまり特定の領域で「抵抗」を担っている人たちに提供することなのである。

ここから「抵抗」や「『特定領域の』知識人」といった概念が、フーコーにとって、「権力」と同様に重要な概念であることが理解できる。フーコーの権力論のなかに「権力」の「戦術」と「戦略」の2つのレベルが存在するということが、「権力」と「抵抗」が「内的関係」にあることや、それらが「お互いに『排除不可能な相手』」であるということを考えればわかるように、「抵抗」や「『特定領域の』知識人」にもそれらの2つのレベルが存在するということがある。つまり「抵抗」や「『特定領域の』知識

人」は、権力のネットワークによって捉えられている（「戦術」関係）が、「『特定領域の』知識人」が「系譜学」による権力分析の成果を「抵抗」の当事者に「道具」として提供することによって、彼らは「権力」に挑む（「戦略」関係）のである。言い換えれば、「権力」と「抵抗」は、既成の「権力関係」である「戦術」関係を拠点とすると同時に、両者は「戦略」関係に位置づけられるのである。したがって「権力」とは、まさに「戦術」を拠点とした「戦略」関係なのである。前節でも述べたように、ここにこそ「権力」のダイナミズムが存在するのである。

おわりに フーコー権力論の新たな再構成に向けて

詳細は繰り返さないが、ここまでフーコーの「権力」概念の2つのレベル 「戦術」と「戦略」というレベル をそれぞれ明示し、それらに関係づけ、そして「系譜学」のなかにそれらのレベルを読み込み、さらに「抵抗」と「『特定領域の』知識人」概念を「権力」概念に位置づけつつ、その概念がもつダイナミズムを提示してきた。従来のフーコー研究においては、このような一貫した観点がなかった。確かに従来の研究では「権力」を説明する際に「戦術」や「戦略」といった概念を使用するのであるが、どちらか一方を重視したり、また軽視したりで、両概念を明確に区別し、関連づけ、そしてさらにそれらを中心に据えてフーコー権力論を論じてこなかった。そこで本稿では「戦術」と「戦略」概念をフーコー権力論の中心に据えて、「権力」概念をそれらの「二重の条件づけ」として捉えてきた。確かにフーコー自身がこれら

の概念について体系的に論じたテキストは存在しないが、彼が論じたさまざまなテキストを読んでいくと、これらの概念が彼の権力論の中心にあることが理解できるし、またこのように彼のテキストを読んでいかないと論理一貫性を保ちえないのである。

そこから筆者の今後の研究課題は、本稿第1章の「第2節 戦略」で述べた「二重の条件づけ」の理解を、本稿の試みよりももう一段階進めて、さらに深めていくことである。この「二重の条件づけ」への深い理解は、本稿で扱ったミクロ・レベルの権力、すなわち「規律・訓練」というテクノロジーの理解だけでは不十分である。これを理解するためには、「規律・訓練」テクノロジーとは別のレベルでの権力テクノロジー、すなわち18世紀の後半に出現した「調整 *régulation / régularisation*」というマクロ・レベルのテクノロジーをフーコーの理論のなかで捉えなければならない。そしてこの「調整」概念を規定すると同時に、この概念と本稿で提示した、「戦術」、「戦略」概念によって構成される「規律・訓練」概念とを関係づけることによってこそ、上に述べた「二重の条件づけ」をより深く理解することができるのである。

したがって、この「調整」テクノロジーが「規律・訓練」テクノロジーといかなる関係にあるのかを解明することは、今後の主要な課題となるにしても、その研究の方向性を示すために、この関係について最後に少しだけ触れておかなければならない。要するに「調整」テクノロジーは、その対象、対象の性質、機能、そしてそれが作用する領域（ここでは紙数の関係からそれらについては詳細に述べない）のレベルが、「規律・訓練」テクノロジーのそれらに対して、全く異なっている。フーコーはこの

2つのレベルを次のように2つの系列に整理している。「2つの系列が捉えられる。〔つまり、それは〕身体 - 有機体 - 規律・訓練 - 諸制度という系列と、人口・住民 - 生物学的諸過程 - 調整メカニズム - 国家という系列である」⁸⁵⁾と。しかしこれら2つの系列は個々別々に作用するのではない。フーコーは述べる。

「この二つのメカニズムの総体、つまり一方の規律・訓練的総体と他方の調整的総体は、同じレベルで存在しない。このことは、正確に言えば、その総体に、相互に排除することなく、一方〔の規律・訓練〕を他方〔の調整〕に節合しうることを可能ならしめるのである。我々は、大半の場合において、権力の規律・訓練的メカニズムと権力の調整的メカニズム、つまり身体に対する規律・訓練的メカニズムと人口・住民に対する調整的メカニズムが、相互に節合されていると述べることさえできる」⁸⁶⁾。

そして彼はこのように節合されている領域として、労働者都市 *cit  ouvri re* とセクシュアリテを例示する。特に労働者都市でも作用しているセクシュアリテを重視し、このセクシュアリテを「身体と人口との交差点 *carrefour*」に位置づける⁸⁷⁾。そしてこの交差点に位置する領域こそ、フーコーがいうところの「身体の側の極と人口の側の極をもって生一般を引き受けたところの権力」⁸⁸⁾、すなわち「生 - 権力 *bio-pouvoir*」の標的となるものなのである⁸⁹⁾。

またフーコーは1978年のコレージュ・ド・フランスの講義から、本格的に主権、「規律・訓練」、「調整」、そして「生 - 権力」といったテクノロジーを「統治性 *gouvernementalit *」という概念でもって捉えかえそうとする。彼は

さらに「統治性」研究によって歴史的に遡及した地点、すなわちキリスト教文献に羊飼いと羊との関係を規定する「パストラル権力 *pouvoir pastoral*」をみいだした⁹⁰。そこで、これらの「権力」の諸概念を理解するうえで「節合 *articulation*」という概念は、フーコー権力論のなかで非常に重要な位置を占めているといえる。

まさにこの「節合」という点に注目することによって、先に述べた「戦術」と「戦略」の「二重の条件づけ」を深く理解することができるのであり、またさらに「節合」と「二重の条件づけ」の関係を明確に規定することによって、フーコーの権力論の全体像を捉える可能性が開けるのである。本稿で扱ったテーマは、まずそのための一つの段階である。要するに本稿で試みた「戦術」、「戦略」概念の明確な規定と、それらの関係づけは、フーコー権力論のダイナミズムを理解するうえで最も重要なことであるし、まさにこの試みこそが彼の権力論の全体像をつかむ出発点となるのである。

註

- 1) 重田園江「ミシェル・フーコーにおける知と権力」『情況』1999年4月号別冊, 124頁。
- 2) cf. Michel Foucault (1982 外国語著者名の後のカッコ内の数字は、発表年。以下同様), «The Subject and Power», Hubert L. Dreyfus and Paul Rabinow (1983), *Michel Foucault: Beyond Structuralism and Hermeneutics*, se. ed., Chicago, The University of Chicago Press, pp.211-213 (山田徹朗訳「主体と権力」, 山形頼洋・鷺田清一他訳『ミシェル・フーコー 構造主義と解釈学を越えて』筑摩書房, 1996年, 290-293頁参照)。この論文は、原文の注記で述べられているように、第1章の「なぜ権力を研究するのか 主体の問題」がフーコー自身によって英語で書かれ、第2章のフランス語で書かれた「いかにして権力は行使されるのか」がレスリー・ソーヤ (Leslie Sawyer) によって英訳されて、H.L. ドレファスとP.ラビノウのこの本の「あとがき」にはじめて収録されたものである。したがって、本稿においてこの論文を参照している場合は、原語はすべて英語で記すことにする。
- 3) フーコーは「主体と権力」のなかで、自らの統一的主题として「主体」を提示しているが、この「主体」を捉えるためには、まさに彼固有の「権力」概念が必要であったのである。この「権力」概念は、彼の「系譜学」という方法に欠くことのできないものであり、「系譜学」以前に採用していた「考古学」という方法の欠陥を補うものであることから、彼の生涯の研究にとって「主体」概念とともに、最も重要な概念のひとつであったといえることができる。
- 4) Michel Foucault (1975), «pouvoir et corps», *DITS ET ECRITS, Tomes II*, Daniel Defert et François Ewald (1994) édés., Paris, Gallimard, p.758 (津田真人訳「POUVOIR ET CORPS」『imago』1994年4月号, 第5巻第5号, 128頁参照)。
- 5) Frédéric Gros (1996), *Michel Foucault*, Paris, P.U.F., collection «Que sais-je ?» n°3118, p.79 (露崎俊和訳『ミシェル・フーコー』白水社, 1998年, 97頁参照)。
- 6) 近藤哲朗氏のテキストは「フーコーの権力概念と権力分析の構図」(『ソシオロジ』No.106, 第34巻2号, 1989年9月)と、「フーコーにおける権力分析のパラダイム 『監獄の誕生』の方法と論理」(『ソシオロジ』No.107, 第34巻3号, 1990年1月)の二論文である。
- 7) フーコーはこの行為 *conduct* という用語に二重の意味をもたせている。ひとつは「他者を『指導する *lead*』こと」であり、もうひとつは「可能性の多少とも開かれた領域内で行動する *behave* 様式」である。つまりこの行為の二重性は、権力の行使が自由な主体を前提としていることを意味している (Michel Foucault, «The Subject and Power», *art. cit.*, pp.220-221(邦訳301頁)を参照)。フーコーはいう。「権力が行使されるのは、ただ自

- 由な主体に対してだけであり、主体が自由であるその限りにおいてである。(省略)。決定的な諸要因が全体を飽和状態にしている場合には、権力という関係性は存在しない」(*ibid.*, p.221 (邦訳301頁参照))。と。本稿「第2節 戦略」も参照せよ。
- 8) Michel Foucault (1975), *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, Paris, Gallimard, pp.138-139 (田村淑訳『監獄の誕生 監視と処罰』新潮社, 1977年, 142頁参照)。
- 9) *Ibid.*, p.139 (邦訳142頁参照。以下同様)。
- 10) *Ibid.*, p.139 (142-143頁参照)。
- 11) *Ibid.*, p.140 (143頁参照)。
- 12) *Ibid.*, p.165 (166頁)。
- 13) *Ibid.*, p.166 (166頁参照)。
- 14) *Ibid.*, p.167 (167頁参照)。
- 15) *Ibid.*, pp.167-168 (168頁参照)。
- 16) *Ibid.*, p.155 (157頁参照)。
- 17) *Ibid.*
- 18) *Ibid.*, p.151 (153-154頁参照)。
- 19) *Ibid.*, pp.169-170 (169-170頁参照)。ちなみに『知への意志』においては次のように定義されている。戦術とは「互いに連鎖をなし、呼び合い、増大しあい、自らの支えと条件とを他所にみだしつつ、最終的には全体的装置を描き出すところのもの」(Michel Foucault (1976), *Histoire de la sexualité 1: La volonté de savoir*, Paris, Gallimard, p.125 (渡辺守章訳『性の歴史 知への意志』新潮社, 1986年, 122-123頁参照))。であると。権力が目指すのは、まさにこの戦術の合理性なのである。そしてさらに、この「戦術」はフーコーのいう「調整する管理 *contrôles régulateurs*」, つまり「人口の生 - 政治学 *bio-politique*」につながっていく。
- 20) これら4つの技術の他にも、「規律・訓練」権力を成功に導いた「単純な道具」を3つあげている。それは「階層秩序的 *hiérarchique* な監視」, 「規格化を行う制裁」, そして「試験 *examen*」である。従来のフーコー研究では、この「単純な道具」を強調する傾向がある。しかし本稿では、本稿のテーマと紙数の関係からこの「単純な道具」を省くことにする。もちろんこの「単純な道具」も「戦術」の一要素である。「単純な道具」の内容につい

- ては, Michel Foucault, *Surveiller et punir, op.cit.*, pp.172-194 (175-195頁) を参照せよ。
- 21) Michel Foucault, «The Subject and Power», *art. cit.*, pp.224-225 (305頁参照)。
- 22) *Ibid.*, p.225 (305頁参照)。
- 23) 1981年に行われた, フーコーのコレージュ・ド・フランスの講義, 「主体性と真理」のレジュメでは, 戦略的諸関係について次のように規定されている。「他者あるいは他者たちの操作を賭け金とする諸関係であり, また状況, それら諸関係が展開される制度的な枠, 社会的諸集団, 時代に応じて, 様々な方法や技術に訴えるところの諸関係」(Michel Foucault (1981), «Subjectivité et vérité», *DITS ET ECRITS, Tomes IV*, Daniel Defert et François Ewald (1994) édés., Paris, Gallimard, p.214.) である。
- 24) Michel Foucault, «The Subject and Power», *op.cit.*, p.225 (305頁参照)。
- 25) Michel Foucault, *Surveiller et punir, op.cit.*, p.31 (30-31頁参照)。
- 26) *Ibid.*, pp.31-32 (31頁参照)。
- 27) Michel Foucault, *La volonté de savoir, op.cit.*, pp.121-122 (119-120頁参照)。
- 28) *Ibid.*, p.123 (120-121頁参照)。
- 29) フーコーは「権力関係」と「対抗戦略」を微妙に区別している。一方の「権力関係」は, 広義の政治的強制権を行使する側から捉えた概念であり, それはより安定した秩序をイメージすることができる。他方の「対抗戦略」は, 「権力関係」からの「脱出と逃走」を意味し, それは秩序の安定よりも秩序に対する置換え *renversement* をイメージすることができる。だからといって両者は相互に独立して位置するのではない。それらは, 本論でも示したように相互に包括し合う概念であり, 一方が他方なしには作用しえない関係なのである。
- 30) 他の3つの規則とは「内在性の規則」, 「継続的多様性という規則」, そして「ディスカールの戦術的多義性という規則」である。簡単にみておくと「内在性の規則」とは, 権力と知との関係を相互に外部から関係づけられていると考えるのではなく, 相互に, 内在的に支えあっていると考える規則である。次に「継続的多様性という規則」とは, 「権

力と知」を 権力を握っている者 と 権力を握っていない者 との関係として考えるのではなく、それを「変形の母体 *matrices de transformations*」として考える規則である。最後に「ディスクールの戦術的多義性という規則」であるが、この規則は重要なので詳しくみることにする。この規則は、本論で扱った「二重の条件づけの規則」をディスクールのレベルで述べている部分である。ディスクールは権力と知を節合 *s'articuler* させるために、権力と同様に、それは様々な「戦術」や「戦略」のなかで働く要素としてみなすべきである。つまり「錯綜し、不安定なひとつのゲーム *jeu* を認めなければならないのであって、そこでは、ディスクールは同時に権力の道具にして作用 = 結果 *effet* であるが、しかしまた、障害、支える台、抵抗の点、正反対の「戦略」のための出発点でもあるのだ。ディスクールは権力を運び、産出する。ディスクールは権力を強化するが、しかしまたそれを内側から蝕み、危険にさらし、脆弱化し、その行く手を妨げることを可能にする」(Michel Foucault, *La volonté de savoir, op. cit.*, p.133 (130頁参照)。)。また同じ「戦略」内部においても、異なり矛盾するディスクールもあるのである。だからこれらのディスクールに問いかけねばならないのは、「二重の条件づけの規則」と同様、「2つのレベルにおいてであり、それはこれらのディスクールの戦術的生産性(権力と知とのいかなる相互作用をそれは保障しているのか)と、その戦略的統合(いかなる局面、いかなる力関係が、その時生ずる様々な対決のかくかくの情景においてこれらのディスクールの使用を必要たらしめているのか)なのである」(*ibid.*, p.135 (131頁参照)。)。

31) たたとえば「家族における父は、君主あるいは国家の『代弁者 *représentant*』では」(*ibid.*, p.132 (129頁参照)。)ないし、「君主あるいは国家も別の尺度における父の投影では少しもないのである」ということである (*ibid.*)。

32) たたとえばフーコーは、「作戦」として「出生率のマルサス的コントロール」、「人口増加主義 *populationniste* の推進」、「セックスの医学化」、「生殖とは関係のないセックスの精神医学化」をあげている (*ibid.*, p.132 (129頁) を参照)。

33) この «*enveloppe*» とは、「包み込む」という意味であり、つまり「戦略」によってある装置を「包み込む」と解釈できる。

34) *Ibid.* p.132 (129頁参照)。

35) 「考古学」という方法を使用しているテキストにおいては「権力」概念が提示されていないのであるが、筆者はそれらのテキストにおいてそれが潜在化していると考えられる。

36) この両者の関係については、理論的には非常にデリケートな問題であり、また実践的にはフーコー自身の体験とかかわってくることから、本稿の目的や紙数を考えるとここでは論を展開することができない。したがってこの問題は次回の論文に委ねることにする。

37) この開講講演は、*L'ordre du discours* (邦訳『言語表現の秩序』)として翌年に出版された。

38) Michel Foucault (1971), *L'ordre du discours*, Paris, Gallimard, pp.10-11 (中村雄二郎訳『言語表現の秩序』河出書房新社, 1981年, 9頁参照)。

39) しかしフーコーは、あるインタビューで、この時点においては「ディスクールの事実と権力のメカニズムとの節合 *articulation*」についての問い自体は間違っていなかったが、「権力」概念の把握について伝統的な考え方を採用していたと述べている。そしてさらに「権力がディスクールに対してもっぱら稀少化という否定的メカニズムを及ぼすように述べているところがあれば、そういう捉え方は一切放棄したい」と述べている (Michel Foucault (1977), «*Les rapports de pouvoir passent à l'intérieur des corps*», *DITS ET ECRITS, Tomes III*, Daniel Defert et François Ewald (1994) éds., Paris, Gallimard, pp.228-229 (山田登世子訳「身体をつらぬく権力」『ミシェル・フーコー 1926 - 1984』新評社, 1984年, 164-165頁)を参照)。しかし、ディスクールの外部を想定し、そこに「真理への意志」を位置づけ、主体分析の可能性を開いたという意味では、後の「権力」分析に移行する過渡期としてこの開講講演を位置づけることができ、そしてそういう意味に限って、「萌芽」と言っているのである。

40) Hubert L. Dreyfus and Paul Rabinow (1983), *Michel Foucault: Beyond Structuralism and*

- Hermeneutics, op. cit.*, p.106 (159頁参照).
- 41) しかしフーコーがニーチェを正確に解釈し、両者が完全に一致しているかどうかということ考察することは、非常に複雑で、困難をとまなうし、また本稿の目的からずれるので、また次の機会にゆずることとする。ここで問題なのはフーコーの「系譜学」であり、フーコー流のニーチェ解釈なのである。
- 42) Michel Foucault (1971), «Nietzsche, la généalogie, l'histoire», *DITS ET ECRITS, Tomes II*, Daniel Defert et François Ewald (1994) édés., Paris, Gallimard, p.138 (伊藤晃訳「ニーチェ・系譜学・歴史」『エピステーメ』 -0号, 1972年, 212頁参照).
- 43) *Ibid.*, p.138 (212頁参照).
- 44) *Ibid.*, p.138 (212-213頁).
- 45) *Ibid.*, p.138 (213頁参照).
- 46) *Ibid.*, p.139 (213頁参照).
- 47) *Ibid.*, p.136 (211頁参照).
- 48) *Ibid.*, p.141 (215頁参照).
- 49) *Ibid.*, pp.142-143 (217頁参照).
- 50) *Ibid.*, p.143 (217頁参照).
- 51) 「身体の政治的テクノロジー」は「身体作用の科学とは正確には言えない身体についてのひとつの『知』と、体力を制する能力以上のものである体力の統制」(Michel Foucault, *Surveiller et punir, op.cit.*, p.31 (30頁参照).) によって構成される。
- 52) Michel Foucault, «Nietzsche, la généalogie, l'histoire», *art. cit.*, p.145 (219頁参照).
- 53) *Ibid.*, p.145 (219頁).
- 54) *Ibid.*, p.143 (218頁参照).
- 55) *Ibid.*
- 56) Michel Foucault (1977), «Non au sexe roi», *DITS ET ECRITS, Tomes III*, Daniel Defert et François Ewald (1994) édés., Paris, Gallimard, p.268 (桑田禮彰・福井憲彦・山本哲士訳「セックスと権力」『ミシェル・フーコー 1926 - 1984』新評社, 1984年, 68頁).
- 57) *Ibid.* p.268 (68頁参照).
- 58) フーコーは、「軍事力 forces の諸関係についてのこうした分析を強化すべき」(*ibid.*, p.268 (69頁参照).) であると述べている。
- 59) Michel Foucault, *Surveiller et punir, op.cit.*, p.170 (170頁参照).
- 60) Karl von Clausewitz(1968), *ON WAR*, Penguin Books, Middlesex, p.119 (篠田英雄訳『戦争論(上)』岩波書店, 1968年, 58頁参照).
- 61) この点については、R.ボデモ次のように指摘している。「戦争学の諸研究が栄える国における戦争は、フーコーにとって、変わることはない参照点である。しかしながら彼はクラウゼヴィッツの有名な格言を覆し、政治を他の諸手段による戦争の延長としてみなすのである」(Remo Bodei (1986), «Foucault : Pouvoir, Politique et Maîtrise de soi», *Critique*, n° 471-472, p.908) と。
- 62) 「真理 (vérité)」とは「真 le vrai と偽を見分け、真なるものに特定の権力作用を付与する時に使う、もろもろの総体」(Michel Foucault, «Entretien avec Michel Foucault», *art.cit.*, p.159 (96頁参照).) のことである。フーコーは政治的問題を「科学/イデオロギー」としてではなく「真理/政治」として考える。
- 63) *Ibid.*, p.145 (80-81頁参照).
- 64) Remo Bodei, *art. cit.*, p.908.
- 65) Daniel Defert (1994), «Chronologie», *DITS ET ECRITS, Tomes I*, Daniel Defert et François Ewald édés., Paris, Gallimard, p.49 (石田英敬訳「年譜」『ミシェル・フーコー 思考集成』筑摩書房, 1998年, 53頁参照).
- 66) Michel Foucault, *La volonté de savoir, op.cit.*, p.126 (124頁参照).
- 67) Michel Foucault, «Non au sexe roi», *art. cit.*, p.267 (67頁参照).
- 68) ピエール・ブルデュー, 加藤晴久編『ピエール・ブルデュー 超領域の人間学』藤原書店, 1990年, 201頁。
- 69) Michel Foucault, «The Subject and Power», *art. cit.*, p.211 (290頁).
- 70) *Ibid.*
- 71) 「プログラミング」とは行為者に対して法と真理を強要することである (Michel Foucault (1980), «Table ronde du 20 mai 1978», *DITS ET ECRITS, Tomes IV*, Daniel Defert et François Ewald (1994) édés., Paris, Gallimard, p.22 (尾崎浩・桑田

- 禮彰・福井憲彦訳「歴史と権力」『ミシェル・フーコー 1926 - 1984』新評社, 1984年, 145頁)を参照)。また文脈によっては、法や真理を形成するという意味で使用されている。
- 72) Barry Smart (1986), «The Politics of Truth and the Problem of Hegemony», *Foucault: A Critical Reader*, David Couzens Hoy ed., Oxford, Basil Blackwell, p.171 (椎名正博・椎名美智訳『フーコー - 批判的読解』国文社, 1990年, 171-172頁)。
- 73) Michel Foucault, «Table ronde du 20 mai 1978», *art. cit.*, pp.32-33 (161頁参照)。
- 74) *Ibid.*, p.32 (160頁参照)。
- 75) Michel Foucault, «The Subject and Power», *art. cit.*, pp.222-223 (303頁参照)。
- 76) Michel Foucault (1978), «On Power», *Politics, philosophy, culture: interviews and other writings of Michel Foucault, 1977-1984*, Lawrence D. Kritzman (1988) ed., London, Routledge, p.107 (桑田禮彰訳, 「権力について」『ミシェル・フーコー 1926 - 1984』新評社, 1984年, 35頁参照)。
- フーコーは、この「批判的」という意味が「破壊、拒絶、拒否」のことではなく、「検討」という意味であると述べている。まさに「系譜学」による「真理」の検討なのである。
- 77) Michel Foucault, «Entretien avec Michel Foucault», *art.cit.*, p.156 (90頁参照)。
- 78) *Ibid.*, p.156 (91頁)。
- 79) Michel Foucault (1972), «Les intellectuels et le pouvoir», *DITS ET ECRITS, Tomes II*, Daniel Defert et François Ewald (1994) éd.s., Paris, Gallimard, p.307 (渡部直己訳「知識人と権力」『杼』4号, 1985年, 7頁)を参照。
- 80) この理論と実践との関係についてドゥルーズは、フーコーとの対談で、次のように述べている。「理論というものは、まさに道具箱 *boîte à outils* のようなものなのです。シニフィアンとはなんの関係もない...そいつが役に立たなければならぬし、機能しなければなりませんからね。またそれ自体のためにあるわけではない。理論家その人をはじめとして、それを使ってくれる人々がもしいなかったとしたら、まず理論家がそうならば理論家ではなくなるばかりか、その理論がなんの価値をもたないか、時機がまだいたっていないということなのです。だれもひとつの理論にたちもどったりはしないし、ほかのいくつもの理論がいま作られつつあり、ほかのいくつもの理論がこれから作られねばならない」(*ibid.*, p.309 (9頁参照)。)と。
- 81) 代行 = 代表という役割を担わないという意味においては、フーコーの「『特定領域の』知識人」が、フランス革命期以来の「国民主権 *la souveraineté nationale*」と「人民主権 *la souveraineté populaire*」との対立、つまり「代表」制によって人民に対する独立性や無責任性を保障される前者と、受任者(代議士)の恒常的罷免可能性をもつ「命令的委任 *mandat impératif*」の制度をとる後者との対立における後者の系譜から影響を受けているのではないと思われる。この点については、筆者の今後の研究課題である。フランス革命期以降の「国民主権」と「人民主権」の研究については、杉原泰雄『国民主権の史的展開 人民主権との対抗のなかで』岩波書店, 1985年を参照。
- 82) Michel Foucault, «Les intellectuels et le pouvoir», *art. cit.*, p.308 (8-9頁参照)。
- 83) Michel Foucault, «pouvoir et corps», *art. cit.*, p.759 (131頁参照)。
- 84) *Ibid.*
- 85) Michel Foucault (1997), «*Il faut défendre la société*» *Cours au Collège de France (1975-1976)*, éd. s.dir. F.Ewald et A.Fontana par M.Bertani et A.Fontana, Paris, Gallimard/Seuil, p.223.
- 86) *Ibid.*
- 87) この交差点に位置づけられたセクシュアリテについて、フーコーは19世紀における身体への「マスターベーション」の影響と、人口への性的倒錯者の遺伝の影響をあげている。また後者について、彼は当時の学説、すなわち「諸世代にわたって、つまり第7世代目まで、しかも第7世代から次の第7世代まで続く」(*ibid.*, p.225.)という、19世紀後半の医学的知の中核であった「変質説 *dégénérescence*」を取りあげている。「つまりセクシュアリテは、[一方で]それが個人的な病気の中心にある限り、また他方で、それが変質の中核にある以上、規律・訓練的なものと調整的なもの、すなわち身体と人口との節合点 *point d'articu-*

lationを表すのである」(*ibid.*)

88) *Ibid.*, pp.225-226.

89) 生命を保証するこの「生 - 権力」を捉えるためには、近代国家の権力と人種主義の関係が非常に重要である。言い換えれば、生命を保証する「生 - 権力」が、なぜジェノサイドや戦争などの殺人機能をもつのかということは、近代国家と、そ

こにおいて発展した人種主義との関係を捉えなければならぬ。「生 - 権力」の出現と、それによる近代国家の機能への人種主義の組み込みの問題は、次回の研究に委ねることとする。

90) 「パストラル権力」については、拙稿「フーコー権力論の中心と課題」『桃山学院大学 学生論集』第10号、1995年を参照せよ。

A Study on Foucault's Concept of 'Power' : The Concepts of 'Tactics' and 'Strategy' as Components of 'Discipline'

Hirofumi FUJITA *

Abstract: This paper aims to prove that Foucault's concept of 'discipline' is composed of the military concepts of 'tactics' and 'strategy', and to reconstruct Foucault's theory of power as a dynamic theory. To attain these aims, the following three issues have to be examined in accordance with Foucault's logic.

First, this paper defines the concepts of 'tactics' and 'strategy,' and specifies that these concepts are related to each other as the 'double conditioning'. Secondly, I try to examine the method of the 'genealogy' which is the matrix of the 'tactics' and 'strategy', and define these concepts from a methodological point of view. Thirdly, by focusing on the concepts of 'tactics' and 'strategy' in Foucault's theory of power, this paper relates both of these concepts to the concepts of 'resistance' and '“specific” intellectual' under a consistent logic, which are very important concepts in Foucault's theory of power.

Finally, I would like to suggest my next work to be done concerning other types of Foucault's 'power' concepts, by basing upon my assertion that it is important to take up the concepts of 'tactics' and 'strategy' as a starting point in Foucault's theory of power.

Key words: tactics, strategy, genealogy, resistance, 'specific' intellectual

* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University